—詩—

十本の指

三川　田中繁満

十本の私の指
呼び名もちがう
かたちもちがう
あたりまえのことだ

だが私の十本の指も
仂く仲間みんなの十本の指も
資本の力で日本を牛耳る奴の
十本の指も
同じだ

その十本の指で
私達はしあわせを追い求めて
きた
いまもそれを追い求めている
そのため私達は十本の指で
お互いにかたくにぎり合って
いる
そこが奴らと違っている

きたかぜ

サムーイサムーイ風を吹きつける
毛布にくるまった主婦の人びと
その顔は明るく
その髪は黒く

きたかぜはその主婦の黒髪をな
びかさんと
強く強く吹きつける
時には冷たい雨を
時には硬いみぞれをぶっつける

だが
私たちは負けない
きたかぜに
雨に
みぞれに
その目はやさしいが
その心は強い

〈短歌〉ハンスト

四山　菊川五百子

ばばたばたとビニールのカベ
がなる
きたかぜはこれでもかこれでも
かと

ハンストに加えられし任重し続
られるようただ祈るのみ

忙しい彼女の持って来てくれた
水仙の花でなぐさめられる

激励の歌ともにうたおうと思え
ども腰にこたえて声のひくし

白黄の菊の花が活けられて赤き
カーネーション一きわ目立つ

十名の主婦一堂に集まりてぴた
り合った心と心

お互いに励まし続けた十日間ま
たとあろうか三池の主婦たち

かがさずに必ず見せし顔の主み
な励まされはほえむ我ら

激励に来られた人の顔をみて苦
しさ忘れにっこり笑う

騒音のはげしい夜半に目がさめ
てしばしねむれず思いにふける

肩のこりはげしく痛みいかにせ
ん腰のだるさもそれにくわえて

親切に日毎看護してくれる彼女
らに感謝の気持いかに表わす

毎日の汚物処理までしてもらう
彼女らに申訳なし

十日目の朝より胸の苦しがりた
れにもいえず一人もだえる

ハンストを終えて旅館にむかう
夜の町車の中で涙あふれる

我一人衰弱ありて人々に心配か
しをすまぬと思う

さつきまで眠いあったこの部屋
も友の帰宅で淋しさましぬ

動員ピケ所見

宮浦　高椋竜生

動員のマイクにはたとテレビ消
し妻と顔見合わせ聞き入る

動員のヤッケ着るとき妻と子が
刺さるるから雑誌入れて行けと
いう

会社のピケ小屋にCO座り込む
坑底座り込みも辞せじと

ピケ焚火焔の夜空に立ち上ると
き鉱門に〝殺人会社〟と大書す
を見き

硬二函坑木一台も辞さじとピケ
張る雨のハチマキしめて

ピケ小屋に動員待機のペンをと
りおりおり詠める闘いのうた

灯もくらくCO座り込むピケ小
屋より笑いごえどっとときおり
聞ゆる

音たてて廻り来し菓子袋より一
つをつまみ隣りへまわす

ピケひと日乾きし喉にたらたら
としたたる熟柿一気にすすりぬ

三池を訪問して

西鉄田川　桜井美代子

三池を訪問して一番心に残っているのは、人々の暖かさだ。私たち田川の三人の仲間が民泊した大佐古さんの家で、夜更けまで三池の今までの闘い、現状を聞かせてもらった。家族がみんなスクラムを組み、夫は第一線で闘い、妻は家庭を守り、子供はスクスクと育った。

奥さんのサヨ子さんが「みんな強く雄々しくなるということを教がよくなることは私がよくなること、私がよくなることはみんながよくなること」といって、自分の母親に組合運動を理解させたという話が胸に残る。何が三池の人々を、こんなにも強くやさしくつくりあげたのか？追いつめられ、押さえつけられた人間は、仂く者の未来を信じていれば、どんなにも奪われ、妻の顔も子供の名前も忘れてしまった夫。家族の悲嘆は胸をえらられた。

三池の第一組合の人々は「自分たちは正しいんだ」と信じ、誇りをもって前進している。最後に自分たちの勝利を信じているから！

私の職場を見ると、自分だけを大切にして、本当に大切な大きな目的を見落している人が多いのは残念だ。もっと大きく目を開き、大きく行動しよう！

CO患者家族の会との交流は、COガスのむごたらしさを教えてくれた。その日から身体の自由をえてくれた。私も、自分のからを破り闘います。勝利を信じて。

団結餅つき

宮浦通松　高橋保子

師走というよりむしろ小春日和といった暖かさでした。今日はわが班恒例の団結餅つきである。早朝より思い思いに身支度をととのえた父ちゃん、母ちゃんが現場へ集まる。予想外の好天にどの顔も明るい。

気持よく燃えるかまどの上でもち米のむせる香りが立ちはじめるといよいよつきはじめだ。「きねはだれか」どこからともなくかけられた声に「だっでんきねたい！」「三池労組はみんなきねぞ」という言葉が一斉にはねかえる。

資本のあくどい弾圧に抗しつつここまで闘い抜いてこられたのは「きね」と自称する根性、労仂者魂があったればこそと思うと一瞬胸のあつくなる思いがしました。やがて高らかに響く杵の音に、もよりの子どもがぞろぞろと集ってきます。

内坑というより本坑化した主婦のアルバイトをかかえて正月餅のほとんどが賃づきに託される現状では、餅つきの杵の音は子どもにとって珍らしいものの一つであり大人にとってもなつかしいものであろう。子どもをつれた新労組員の顔も見える。

いよいよつきあがるころになると今度は「ばあちゃん」「おばちゃん」の登場です。「ばあちゃんつけたよ」「おばちゃん早く」…いまは停年を迎え息子の代になったお母さん方のなれた手つきでちぎられた餅をもみながら、私は二人ほほえむのでした。

最低賃金といわれる常二番勤務者を半数かかえていながら、暗い影一つ宿さず各人の持ち味を生かして、しっかりとチームワークの取れた班、班会議では悩みのすべてを打ちあけてともに涙し、励ましあい、また、ある時は団結旅行で生活の疲れをいやしながら、一旦緊急の場合は強い蔭の力として精一杯の努力を惜まぬ仲間、私はこうした雰囲気の中に支えられる自分をつくづく幸せと思った。

よくオルグ交流その他でみえられた方に「とっても家族的ですねうらやましい」という言葉を聞く。事実、年令的にいろいろな層をかかえたわが班は、なごやかな大家族である。

第四次合理化の一端として三川統合され退転、その他で変動のはげしい中で、去年の顔ぶれそのままでなされた団結餅つきが、来年もそのつぎもいついつまでも続きますよう、念じつつ満ぎされた思いで楽しい一日を終えたのでした。

ある思い出

宮浦　平田光男

それは、大南定時制を卒業する一年前の春だった。両親の郷里である鹿児島の薩摩へ、亡くなった母が私を連れて里帰りをしたことがあった。

気候はよし、鈍行の汽車はどんな小さな駅にも停車して乗客を迎え、下車する人を送って行く。そのたびに、満開の桜を十分ながめさせてくれた。

遠くをながめれば山々が私を中心に回転しているようで、大きな気持ちになり、乗客で混んでいることをしばらく忘れることもできた。

亡くなった母がなぜ、私をこんな遠くまで連れて行くのかは、私も年ごろであったから大方は察しがついてはいたが、それはともかくとして目的地に着き、その人にも合い、やれやれと思っていたら母が、自分の兄に合いに行くというので、私共は国分まで足を伸ばすことになった。

そこは、昔金が採れる山があって繁栄した時代もあった町である。ホームには人がいっぱいで、あふれんばかりの状態で、なにか異状な人だかりを見た。

汽車が動き出すと、突然その人だかりが一団となってわめき、泣きながら、手を振る人もあり、ハンケチで目を押さえたまま顔をうつむけてしまう人もあった、

私はしばらくの間は、なぜか解らなかった。これがはじめて私が見た集団就転で、しかも出発の子どもたちをその母親たちが見送っている姿であった。多分中学を卒業したばかりの少年少女たちが、引卒者に連れられ、私たちが乗っている同じ汽車に集団で乗せられ肉親の見送りに合わせて泣きじゃくっているに違いない。

もし、その集団が私たちの車輌に乗っていたら、きっと私も一緒に涙を流したことだったろう。見送っていた人々の姿を思い浮かべると、現在でさえなお胸が熱くなるのだから。

先日、私たちの校区の公民館長会議があった。私は公民館長でありながら、公民館活動がよくつかめず、もっぱら先輩の人に甘えて後から歩いているに過ぎないが。その折り、ある公民館長さんが私たちの所へきて「三池労組の歌はどこんもんも知っとるばい。俺がのオ、ちょっと旅行したときくさん、どこん駅でやったか、集団就転に行く者と、見送る者とあったたん。そうしたらくさん、見送りする者も学校生徒やったばってん、ホームにスクラムは組んで、〝炭掘る仲間〟ば歌いだしたつばん。そしてのオ、汽車に乗っとるやっとんも一緒になって、その歌ばいっしょになって歌いよるじゃなっかん。俺ァびっくりしたのオ」。

私はその夜会議から帰り、床についてもどうしても寝むれず、天井ばかりみつめていた。そして、足の爪先から力がわいてきた。

心に食い入るその像

本橋成一写真集「炭鉱（ヤマ）」

十一月出版された「炭鉱（ヤマ）」は久し振りの炭鉱写真集である。撮影者の本橋成一は、まだ二十八才のフリー・カメラマン。本橋は、六五年いらい筑豊をはじめ、雪の北海道から夏草のおい茂げる九州の炭鉱地帯を四年がかりで撮りつづけてきた。

かって「日本資本主義の火の床」であった炭鉱は、いまや「死の床」と化しつつある。日本資本主義が自からの「死の床」を恥部視して、ほんのわずかな救済策で引導を渡そうとしているこの時に、そのヴェールを払いのけてそこに横たわる冷酷な事実をわれわれはみつめなければならない。

その意味で、少々高い本だが、この写真集を〝読む〟ことをすすめたい。しかも、本橋成一の眼は「死の床」と一体となりながらしつつようにその中の「人間」をさがし求める。それだけに、その写真はわれわれの心に深く食いこんでくるのである。（現代書房刊・一、二〇〇円）

健康のバロメーター

のどの衛生

〝のど〟の病気といえばへんとうせんぐらいしか思い出さない人が多いと思いますが、〝のど〟に苦痛がないのは健康のしるしです。〝のど〟は人間の生存の基本である空気と食物が通過する所であるばかりでなく、声と味にも密接な関係がありますから、きわめて微妙な場所です。患者さんの訴えも千差万別で種類が多く、鼻や気管はもちろん、胃唾液せん、歯などや心臓、じん臓、甲状せん、糖尿病と全身的な影響ものどに現われます。

さて、〝のど〟のぐあいが悪くなった時、まず〝かぜ〟であるか〝かぜ〟以外の病気であるかを判断してください。一週間以上も異常が続くようでしたら〝かぜ〟ではないのですから、〝のど〟そのものの病気の影響かということもある程度見分けをつけたいと思います。また急性に病状の激しい病気と、慢性で軽い症状の場合とありますから、専門医に相談しなければなりません。

たばこも酒も〝のど〟を通過し、害になりますから、できるだけやめるべきです。特に体質的にたばこや酒の害が強く現われる人がありますから注意が必要です。うがいは毎食事の前後に行なうことをおすすめします。マスクも時と場所によっては有効です。